

## 幼稚園参観記

橋一つへだてて東京と接するここR市の一隅に、うらやましいほどひろびろとした学園がある。その南の門をくぐり、目指す幼稚園にと足を運べば、子どもたちはちょうど自由遊びの最中である。規模の小さい東京の幼稚園ばかりみてきた私たちの眼には、すべてがいかにも広く、のびのびと感ぜられてならない。

園長の話によれば、「この園舎の建坪は、上下あわせて四百坪であるが、二階は掃除と管理がいきとどかず、一階の二百坪だけを使用している。しかし、もともと軍需工場の古い建物を買いうけたものであるから、水道その他保育室として改築するにはかなり無理があり、三年後には新築することになっている」とのことであった。そ

して、同じ敷地の中に幼・小・中・高・短大と棟をならべているので、大きい感じはするが、この中で安心して園児を遊ばせることの出来る庭の広さは、約三百坪だとのことであった。なるほどよく見れば、軍需工場から保育室にきりかえるために床を二重にしてあり、また窓ガラスをとりかえたりして、随分苦心をはらっているようであった。

次に園児についてみると、創立当時は農家の子どもが多かったが、現在では約七割が、勤人の子どもとなっている。年長クラス、年少二クラス、合計二百四十五人がここに通園しているが、この地域は、年々一年保育児の数が増し、二年保育児の数が減少しているので、その組分けはなかなか

容易ではない。年少組の中には三歳という子どもも二、三人はまじるし、時には五歳児の四月生れの子どもを、四歳児の中に入れたりもしなければならぬ。また、四歳児の組で年令差をきけられない場合には、机を別にしてやってみたりする。このように、この問題は現在この園にとって最大の悩みとなっているのである。

こういうわけであるから、四月ともなれば、カリキュラムをたてるのに先生がたは無我夢中である。大体月はじめに、年長組と年少組で打合せをしてカリキュラムを考え合うのであるが、一学期は、二年保育はここまではやる、一年保育は出来る範囲と

いう線に進む。二学期になると、このような心がまえははずされる。そして、やってみたときの経過や、反省については、自由に話し合う。先生がたは子どもたちを送り出すと、よほどのことのない限り、必ず顔を合せて、今日あったことを話し合うのが習慣になっている。そし

て、そのことのために時には事務的な仕事  
がはかどらないということも当然ありうる  
ので、そこは各自お互に自覚して処理の対  
策をわきまえているから、別に問題はな  
い。こんなふうであるので、どの組のこと  
についても大体のことがわかつているか  
ら、たいへん心強いのである。

今日は、年少組のある組では、自由遊び  
のあと紙芝居の製作にとりかかった。「赤頭  
巾」の紙芝居が破れていたので、これを機  
会に子どもたちが紙芝居を作るようにと考  
えて、計画したものである。まず、子ども  
たちに話をさせる。子どもの話しかたはま  
だまだ少ないので、先生があとを上手にひ  
きとっては、赤頭巾のお話にもっていく。  
そのあとめいめい画用紙に話の場面をえが  
く。子どもそれぞれの興味を第一におき、  
同じ場面を二、三人ずつが与えられた。あ  
とでこの二、三人が大きな紙に合作で一つ  
の場面をつくり、その絵をみながら子ども  
なりに話すことがねらいになっている。こ

の子どもたちは語彙が少なく、簡単な発表  
すらなかなか出来ないもので、紙芝居の製作  
を通して、そういう才能をのばしたいとい  
う意図からである。

年長の中でも年の少ない方の組では、今  
日は動物を画用紙でつくっていた。この組  
の子どもたちは、好きなものを画かせたい  
と思っても、「かけない」と云う。また画  
いたものはなぐりが多いし、四、五人  
を除いては、兎と亀の絵を画くのが大部分  
である。この頃、自分で考えるようにはな  
ったが、表現力に乏しいという欠点をもっ  
ている。だから何とかこれをのばさせるよ  
うに、というのがこの先生の苦心するこ  
ろである。

この組の子どもたちは、最近「お家こっ  
こ」に興味をもち、その家では、犬や猫が  
番をしている。それで先生は、動物を画い  
たり作ったりさせることによって、表現力  
をのばす助けにもし、またこれをもう少し  
大がかりな遊びに発展させたら——と思い

ついた。

だがこの付近では、都会の真中の子ども  
とちがって見聞の機会が少ないので、材料  
が乏しい。いろいろな動物の姿、表情など  
も、なんとかしてとらえることが必要であ  
る。動物の玩具は、もちろん豊かに与えら  
れているし、それぞれ子どもたちが知って  
いる動物もある。だがもっと種類があれば  
なおよいのである。それでたくさん動物  
の絵本が用意された。まず画用紙に絵をか  
き、色をぬる。ハサミを使って切りとり、ノ  
リではりつけて製作は出来る。その間の  
操作をみていると、絵本の絵をみて作る子  
どもが多い。絵本を準備したからといって、  
絵本の動物を作らせようとしたわけではな  
いが、とにかく、こういうものがあれば、  
それをみて作ることが出来る子どもたちは  
のである。見ながらでなければ画いたり作  
ったり出来ないという子どもの創造力、表  
現力をのばすためには、出来るだけ多くの、  
目にふれる機会を作ることが大切だとい

ことを示しているのではないだろうか。

また、四五歳児のまじったクラスでは、粘土細工をしていた。昨日写生の材料に使った果物が、まだ色あせないであるので、今日は粘土で作ってみようというのである。この学園の敷地は、粘土を掘り出すことができる。園内で粘土を掘って、それを早速このような活動に利用できるのである。ゴム粘土を買って使う幼稚園が多い中で、掘り出す作業から始めることが出来るとは、何とよいことであろう。指導をする先生はたいへんであろうけれど、自分たちの手で得た天然の材料を、自由に使うことが出来るとは、何とめぐまれたことであろう。この日、粘土細工の目的は、眼の前にある果物であった。観察に主眼がおかれたためであるが、もつと他の創作にも自由に発展させることが出来たならば、なおよいと思われた。

またある組のことである。山茶花の咲く季節となったが、中にはこの花をしらない

子どももいる。そこで「さざんかの歌」をうたうばかりでなく、先生と子どもたちは山茶花をみに庭におりていった。一つ一つ、ただそれだけを別々に教えるのではなく、先生がよく考えながらお互に関連させるべく誘導していくところは、たいへんよいことであると思う。そのあとのリズム遊びもなかなか楽しそうであった。

さてここに来る子どもたちは、概して背丈があっても体重が少ない傾向がある。そのためこの園では何よりも健康に注意しているとのことであった。例えば、小学校入学がとて無理だと思われるような子どもがいれば、すぐ医者に相談する。その結果、一年延期するような思いきったことも時にはやる。そして小学校二、三年ぐらいまでは、幼稚園の組分けを考慮に入れてもらっている。こういうことは、同じ一つの学園でお互に連結していることの良い点でもあろう。

再びこの園の設備の問題にもどると、最

近ここではテレビを買った。このような文明の恩恵には、まだまだあずかれない子どもがいるので、ある一室をテレビ室に変え、みせるようにした。子どもたちは、曜日と番組をよく覚えていて、楽しみにしている。目下のところまだ見させることにみに終っているが、将来はこれをすすんで教材に利用できるようになるであろう。そして、もつとそのあつかいかたにも工夫が加えられていくことであろう。

またこの学園には、小学校低学年と、幼稚園児のために、スクールバスがある。当番の先生がぎめられ、方向によって順に送りとどけられることになっている。現在これを利用して利用しているものは、四十七名ほどである。このバス料金は、一ヶ月普通七十円、最も遠方で通園に三十五分ほどかかる子どもは、百五十円だとのことである。話はそれるが、ここでは毎月八百円の保育料と、五十円の手当料、百円のPTA会費を徴収している。法人の幼稚園であるが、この県下で

は、とくに法人だからといって補助金が特別に出されるわけでなく、県内全幼稚園ともどうようにあつかわれているのである。

とにかくこの幼稚園は、必要なものは何でも整えられている。経営者と園長とが分立しているから、そのようにどしどし出来るのかもしれない。いずれにしても、じゅうぶんな場所と、沢山の遊具があたえられていることは、たいへん恵まれているといわなければならない。建物の外観こそ悪くとも、設備がいきとどき、一般に比すれば不自由がないので、子どもたちはのびのびとおおらかに育っているのである。

やがてこの建物も改築され、もっと近代的に合理化された理想的な幼稚園として、生れかわることになるであろう。園長先生はじめ先生がたは、どうしたら最も子どもたちのためによい設計ができるか、方ぼうの幼稚園を覗かせていただいているのとこのとである。しかし、もしも経費のことにはあまり気をとられて、新しく建てた園舎が、

狭いものになってしまふならば、この廊下をはさんだ南側の保育室、北側の遊ぎ室、テレビ室、あそびに使える広い部屋、観察室などのある、ちょうど広さから云えば、一組が二部屋も使っている一見粗末なこの建物の方が、余程よかったということにもなりかねない、などと、つまらぬ取越苦勞もしてみたりした。

まとももなくのべたが、以上がこの幼稚園の概観である。広い土地と、ゆたかな遊具、ここに遊ぶ子どもたちは、本当にしあわせそうであった。そして園長さんの話によれば、「先生がたが、本当に自分の仕事として、やっつけいらつしゃるといふことが、大いに子どもたちにプラスになっている」とのことであった。

### フレイベル館社屋移転御案内

新(東京都千代田区神田小川町三ノ一)  
旧(東京都千代田区神田小川町二ノ五)

右のように新たに社屋を新築移転いたしましたので御通知申し上げます。

### 幼児の教育 第五十七巻 第三号

三月号 © 定価 五〇円

昭和三十三年二月二十五日印刷  
昭和三十三年三月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所  
フレイベル館にお願いいたします。